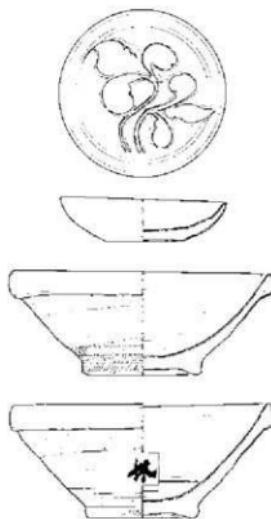


箱崎 63

— 箱崎遺跡第101次調査報告 —



2021

福岡市教育委員会

箱崎 63

— 箱崎遺跡第 101 次調査報告 —



2021

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されており、それらを保護し、後世に伝えることはわたしたちの重要な責務であります。

しかしながら、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実です。そのため本市では、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録を残すことで後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、箱崎遺跡第101次調査について報告するものです。本調査では、中世の土師器壺・皿の廃棄場のほか、井戸や墓などがみつかり、当時の人びとの生活を考えるうえで重要な成果を得ました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業主様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区箱崎3丁目2395-5他3筆の共同住宅建設工事に先立ち、令和元（2019）年度に実施した箱崎遺跡第101次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託・国庫補助事業として実施した。
3. 本書の執筆と編集は神啓崇が担当した。
4. 本書の遺構・遺物実測図、拓影、製図は神が担当した。
5. 本書の遺構・遺物写真は神が撮影した。
6. 本書の遺構実測図中の方位はすべて座標北である。
7. 本書掲載の座標は世界測地系で、標高は街区多角点20C84（H = 2.298 m）を基準とした。
8. 検出遺構は、第1面を001から、第2面を2001から検出順に通し番号を付けた。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SD溝 S E 井戸 SK 土坑 SP 柱穴 ST 墓・埋葬施設 SX 不明遺構
10. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
11. 本文中の陶磁器分類は以下の文献による。
宮崎亮一編 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』（太宰府市の文化財 第49集）

目　　次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 歴史的環境	2
3. 周辺の調査	2
第Ⅲ章 発掘調査の記録	4
1. 調査の経過と概要	4
2. 層序と各遺構面の概要	4
3. 遺構と遺物	6
第Ⅳ章 総括	22
1. 本調査地点の成果	22
2. 土師器廃棄について	22
3. SK2088出土の石彈	22
写真図版	23

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	101次	調査略号	HKZ-101
調査番号	1939	分布地図図幅名	箱崎	遺跡登録番号	2639
事業対象面積	435.85m ²	調査面積	175m ²	事前審査番号	30-2-1256
調査期間	令和元（2019）年9月2日-同年11月8日				
調査地	福岡市東区箱崎3丁目2395-5他3筆				

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、東区箱崎3丁目2395-5他3筆の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財有無の照会（申請番号30-2-1256）を平成31年3月26日付で受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡内にあり、周辺で数次の発掘調査を実施しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。これを受け、埋蔵文化財課事前審査係が令和元年5月23日に確認調査を実施し、現地表面下1mで中世の遺構を確認した。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年8月5日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年9月2日から11月8日に発掘調査、令和2年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地435.85m²のうち、調査対象は工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ240m²で、それ以外の範囲は現状保存している。

調査にあたっては、事業主様および近隣の方々からご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。記して深謝いたします。

SK2088出土石碑について、大木公彦氏、佐藤亜聖氏、高津孝氏、古澤義久氏、森康氏よりご教導を賜わりました。記して深謝いたします。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

調査委託 個人

〔発掘調査 令和元年度〕

調査総括 福岡市経済観光文化局文化財活用部

埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
--------	----	-------

埋蔵文化財課	調査第1係長	吉武 学
--------	--------	------

調査庶務 文化財活用課 管理調整係長

藤 克己

文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝
--------	-------	--------

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長

本田 浩二郎

埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎
--------	--------------	--------

埋蔵文化財課	事前審査係文化財主事	朝岡 俊也
--------	------------	-------

調査担当 埋蔵文化財課 調査第1係文化財主事

神 啓崇

〔整理・報告 令和2年度〕

整理・報告総括 福岡市経済観光文化局文化財活用部

埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
--------	----	-------

埋蔵文化財課	調査第1係長	吉武 学
--------	--------	------

整理・報告庶務 文化財活用課 管理調整係長

大森 秋子

文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝
--------	-------	--------

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長

本田 浩二郎

埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎
--------	--------------	--------

埋蔵文化財課	事前審査係文化財主事	山本 晃平
--------	------------	-------

整理・報告担当 埋蔵文化財課 調査第1係文化財主事（～10月）

神 啓崇

事前審査係文化財主事（10月～）

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

箱崎遺跡は、博多湾と多々良川河口の多々良潟の間にある細長い砂州上に立地する。この砂州は「箱崎砂層」と呼ばれる新砂丘砂層で形成され、海浜砂と風成砂部分からなる。石英質ないし真砂質で粗粒砂の場合が多い。砂層の形成開始時期は、繩文海進極盛期の高海面期後の相対的な小海退期とみられる（下山 1998）。

発掘調査で検出した砂丘の標高から旧地形を復元すると、遺跡の中央付近を頂点として、東西にゆるやかに下降する南北方向の尾根線があるとわかる。これが現在の街区にはぼ沿うように宮崎宮付近まで伸びている。この南側には浅い谷状の鞍部を挟んで標高 2.5 ~ 3.5m の安定した高所がある（中尾 2018a・b）。

また、九州大学箱崎キャンパス内の地質調査によれば、当該地は AD1060 年以降 AD1281 年以前に地層の堆積速度が急に増大していることがわかり、この時期に洪水によって河川から砂が大量供給され、砂州が急成長したという（市原・下山 2019）。

2. 歴史的環境

遺跡全体の検討（久住編 2019・佐藤 2013・中尾 2018a・b）をもとに概略を述べる。

弥生時代から古墳時代は、部分的に集落・墓が営まれるが小規模で散発的である。集落の本格的な展開は、宮崎宮の創建が契機となる。『宮崎宮縁起』によれば、創建は 921 年頃で、飯塚市大分八幡宮から遷座し、大宰少弐藤原真材が造立にあたったことがわかる（重松 2018 : p.26）。創建前後の 10 ~ 11 世紀前半頃は、遺跡南東部に集落が広がり、越州窯系青磁碗やイスラム陶器、石帶巡方、大宰府や鴻臚館との関わりを示す瓦類が出土している。11 世紀後半～12 世紀前半には、井戸や土坑の数が増加し、貿易陶器・墨書き陶磁器が多く出る。とくに墨書き陶磁器は遺跡北西部に集中し、「宮寺縁事抄」の記録にあるような宋人の居住が想定される。12 世紀中～13 世紀前半には、遺跡全域に集落が展開する。鉄やガラスを集落内で生産した痕跡もみられる。元寇前後～室町時代にあたる 13 世紀後半～16 世紀には、引き続き遺跡全域で生活痕跡が確認できるが、15 世紀以降は遺構が少ない。文永の役では宮崎宮が焼失しており、13 世紀後半頃の焼土層や被熱陶磁器の出土を元寇の戦災による痕跡とみる意見もある。

3. 周辺の調査

10 次調査 (551集) 4 世紀末～5 世紀初頭の土師器甕が出たが、本格的な生活痕跡は 12 世紀以降である。12 世紀の遺構は少ないが、砂丘際で人骨・馬骨が出ている。12 世紀後半から遺構が増加し、土坑や井戸を検出している。鋳型やとりべなど鋳造関連遺物が調査区西側で出ており、特に鍋の鋳型が多い。鋳造遺構は出でていないが、調査区の西に鋳造関連遺構の存在が想定される。13 世紀から遺構が少くなり、14 世紀にはなくなる。15・16 世紀には現在の町割りと同じ方向に区画溝がある。

11 次調査 (592集) 12 世紀後半から 14 世紀の井戸、土坑、柱穴で、13 世紀代を主体とする。13 世紀後半の焼土層が出ており、元寇に関連する可能性がある。

21 次調査 (705集) 暗褐色砂質土と、地山砂丘砂上の 2 面の調査である。第 1 面では 13 世紀中～14 世紀の井戸や土坑、第 2 面では 12 世紀中～13 世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、墓を検出している。墓は 12 世紀中頃で、5 基の木棺墓と土坑墓がまとまって出土。集落における共同墓地と思われる。

29 次調査 (813集) 1 面の調査で、12 世紀後半以降の土坑や柱穴などを検出している。

38 次調査 (814集) 1 面の調査で、井戸、土坑、建物跡、焼土層を検出している。時期は 13 世紀後半から 14 世紀が主体である。遺構の柱穴や布掘りの柱列は、現在の町割りと並行して検出した。遺物は、鉄滓がパンケース 1 箱分、ガラスるつぼ（水注の転用品）、柱穴からは、溶解したカリウム鉛ガラスが出ている。

42 次調査 (896集) 12 世紀～14 世紀の井戸、土坑、柱穴を検出した。調査区の東と西で遺構の様相が異なり、東は柱穴や井戸が集中するのに対し、西は土坑の切り合いが主体である。

以上から、本調査地点における遺構の展開は 12 世紀以降で、生産関連遺物や焼土層の検出が想定された。

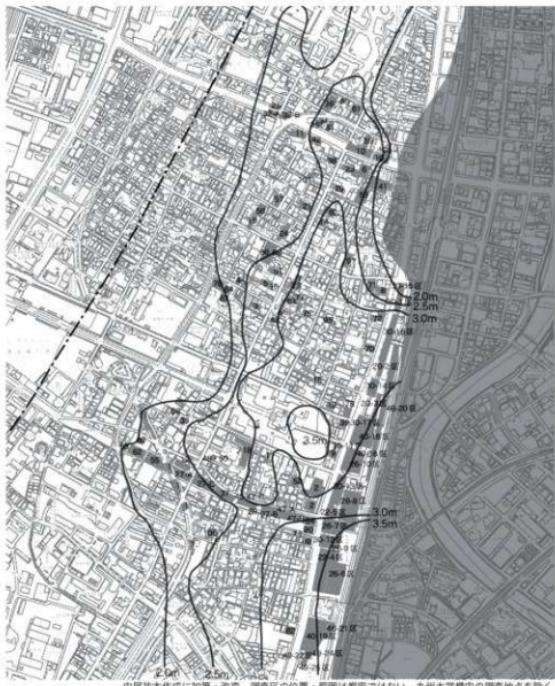


図1 箱崎遺跡調査地点位置図 (S=1/10000)

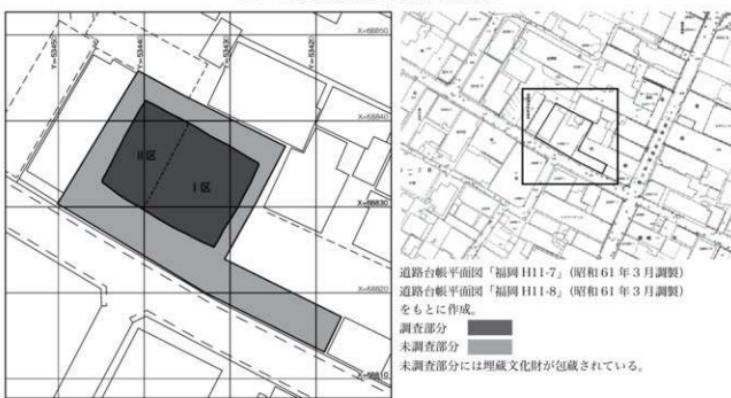


図2 第101次調査地点位置図 (左図:S=1/500・右図:S=1/2000)

第III章 発掘調査の記録

1. 調査の経過と概要

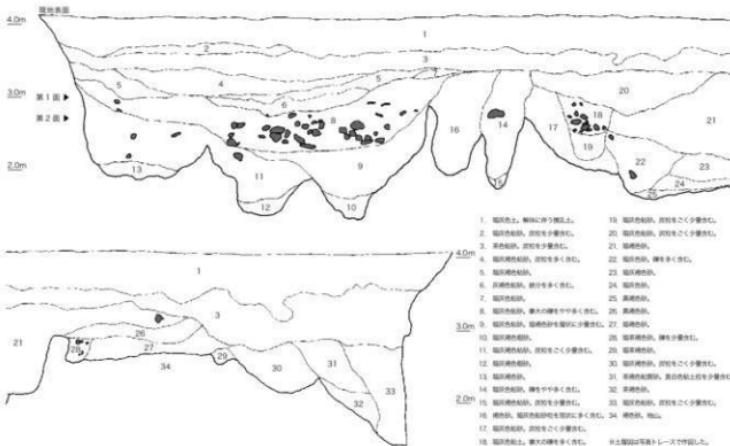
第101次調査地点は箱崎遺跡の北西に位置する。以前は戸建住宅・駐車場であった。道路との比高差はなく、地表面の標高は概ね4mである。確認調査では、現地表面から1m程度下で中世の遺構を確認している。これに基づき、令和元年8月26日～28日に近世から現代までの土を重機で掘削し、場外に搬出した。この動取りは現物提供による。土留めはオープンカットで、安全を考慮し十分な法面をついた。発掘調査は調査区南東側をI区、北西側をII区とし、I区→II区の順に反転した。令和元年9月2日からI区第1面の遺構検出を始め、第2面の砂丘面まで人力で掘削した。同年10月15日に重機で反転し、その後II区第2面まで掘削して同年11月8日に全作業を終了した。

調査では中世の土師器皿・壺の廃棄遺構、井戸、溝、墓、土坑、柱穴を検出した。遺物は、土師器、陶磁器、石製品、金属製品、動物遺存体などがコンテナケース45箱分出ている。

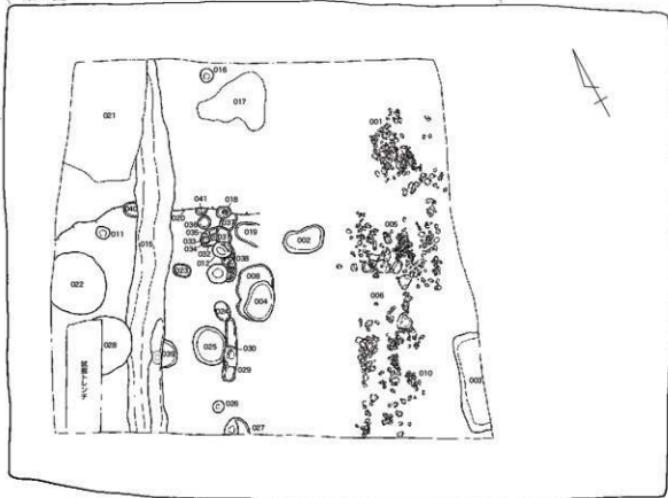
2. 層序と各遺構面の概要

既存建物の解体に伴う搅乱土（1層）下で、近世から近代の茶色粘砂層（3層）となる。第1面は、確認調査の成果をふまえて標高3m前後の暗灰色粘砂層面上に設定した。遺構は疊の集積遺構、土師器廃棄遺構、溝、土坑、柱穴のほか、近世の井戸を検出した。土師器廃棄遺構は13世紀から14世紀を想定する。溝は現在の町割りに沿う。土坑・柱穴は遺構プランが捉えにくく、掘り間違いもある。また、I区東側は全体に近世遺物のみを含んだ暗灰色粘砂の広がりだったため、重機掘取りの段階で0.3m程度下げた。

第2面は標高2.7m前後で検出した地山の褐色砂層上面に設定した。遺構は、溝、土坑、柱穴、井戸を検出した。南北側では柱穴が現在の町割りと同方向に並ぶ。根石をもつものもある。掘立柱建物や区画用の樋が想定される。遺物は小片のみで時期の判断が難しい。また、第1面で検出した土師器廃棄遺構の下面で溝を検出し、同様な土師器の廃棄を確認した。井戸は木桶井戸が出ている。このほか、12世紀中頃～後半の土坑墓を1基検出した。



第1面



第2面

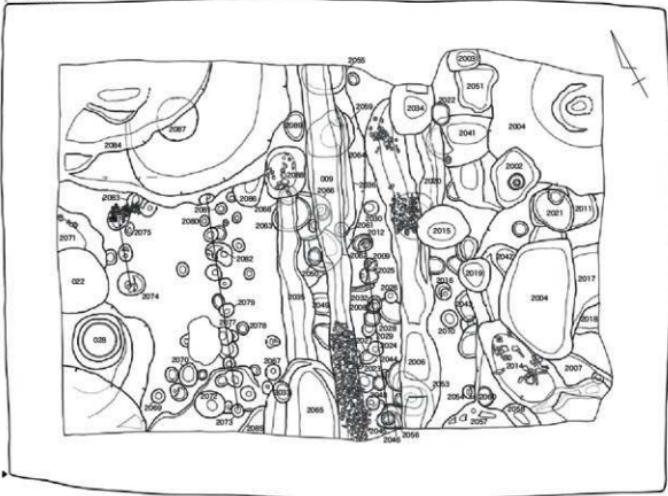


図4 遺構配置図 (S=1/100)

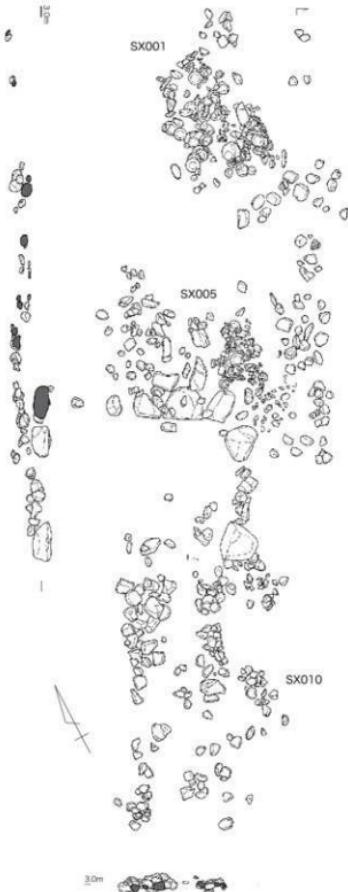


図5 SX006 遺構実測図 (S=1/40)

3. 遺構と遺物

(1) 集石遺構

SX006 (図5・6・Ph.1・2) I区第1面南東側で検出した拳大の砾群である。概ね北東・南西方向に分布し、一部は列状に並ぶ。調査区南西壁土層図(図3)8層にある砾はその続きで、標高2.3~2.8mに集中する。中央部分には人頭大の砾を四方に並べた箇所がある(図6)。石組遺構の基底石残欠か。これら砾群は、掘込みのプランや検出面の土と覆土の違いが確認できなかつたため、面的に掘り下げている。

(2) 土師器廃棄遺構

第1面、SX006の東側で検出した土師器環・皿の廃棄遺構を取り上げる。遺構番号は土師器のまとまりごとに任意で付けた。いずれも検出時点では明確な掘り込みを確認できなかつたが、001のみ第2面で土坑状の掘り込みを確認した。

後述するが、(3)溝で取り上げたSD2006はSX001・005・010の下面で出ており、同様な土師器の集積を確認している。掘削・記録の都合上、溝



Ph.1 SX006 石組遺構 (北西から)

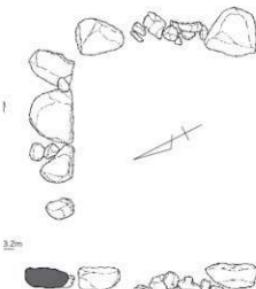


図6 SX006 石組遺構実測図 (S=1/30)

の項で取り上げたが、同じ土師器廃棄遺構である。

SX001（図7～13・Ph.9～12） 土師器廃棄遺構の最も北側に位置する。表土跡取りの際、一部重機で壊したため、本来は検出面より10～20cm程度は遺存していたと思われる。第1面では遺構プランを確認できなかったため、土師器のまとまりを面的に掘り下げた。第2面では長楕円形の土坑状掘り込みを確認した。埋土は上層が暗褐色砂、下層が褐色砂主体で暗灰色粘土粒を少量含む。底はやや掘り過ぎており、本来の底面は土師器が出た最低レベル付近と思われる。第2面上層の出土状況をみると（図10）、土師器の東から西への流れ込みがわかり、東側からの廃棄が想定できる。出土状況の図化・取り上げは、第1面で3回（任意）、第2面上層、第2面下層の計5回おこなった。遺物は、個別番号を付けて取り上げた個体は原則図化し、それ以外は残存が良い個体を抽出し図化した。未図化分はパンケース（薄）3箱分である。土師器のほかに、褐釉陶器、龍泉窯系青磁碗、青磁碗、口禿げ白磁碗、須恵器などが小片で出土した。また、覆土・埋土に獸骨・魚骨などの食物残滓は確認できなかった（目視による観察のみ）。簡・水洗洗浄はしていない。

1～101は第1面、102～199は第2面上層、200～249は第2面下層、250～289は区分なしの出土遺物である。土師器壺・皿は全て底部系切である。壺は、①口径11～12cm、器高3～3.5cm程度、薄手で稜線が多く、焼きしまりの良い、透明橙色、口径に対して底径がより小さく、器高が高めのものと、②口径12～13cm、器高2.5～3cm程度、厚手で稜線が少ない、橙色～暗橙色、口径と底径にあまり差がないものに大別できる。第2面下層では②が主体である。42・47・62・100・125・126・156・158・278は口縁部や胴部にススが付着するため、灯明皿であろう。22・206・212は台付灯明皿で、胴部中央に焼成前穿孔を施し、芯通孔とする。

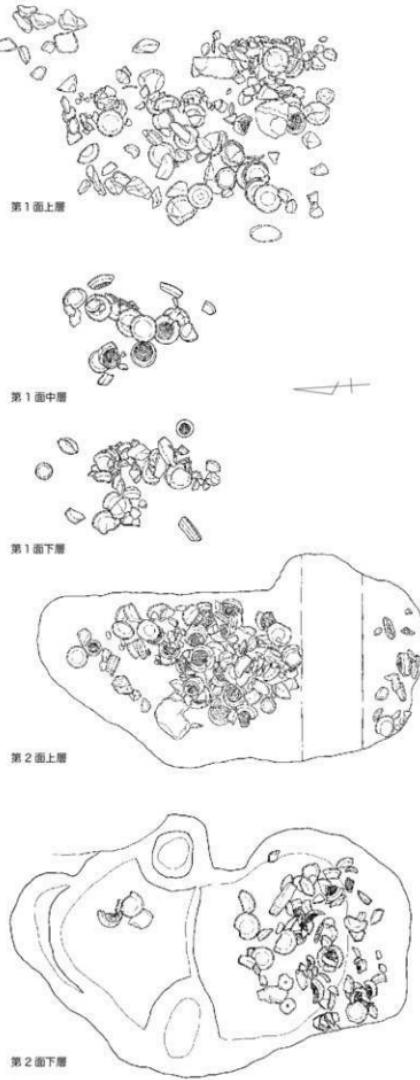


図7 SX001 遺構実測図 (S=1/20)

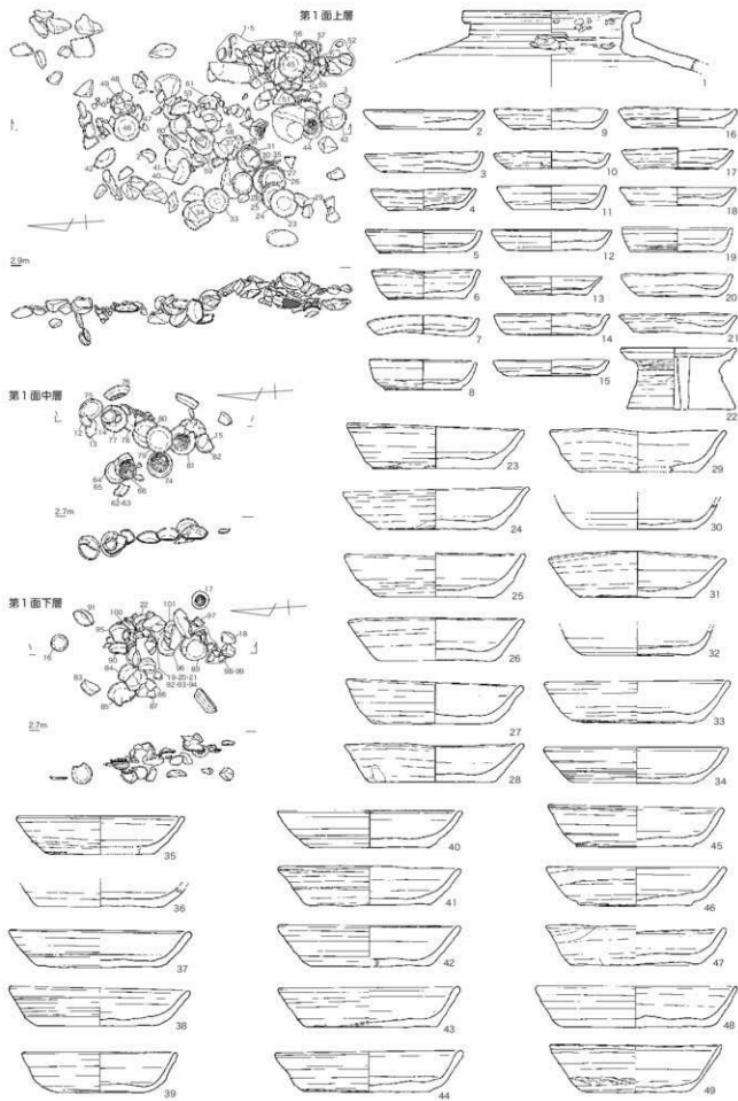


図8 SX001 第1面遺構実測図 (S=1/20)・第1面出土遺物 (1) 実測図 (S=1/3)

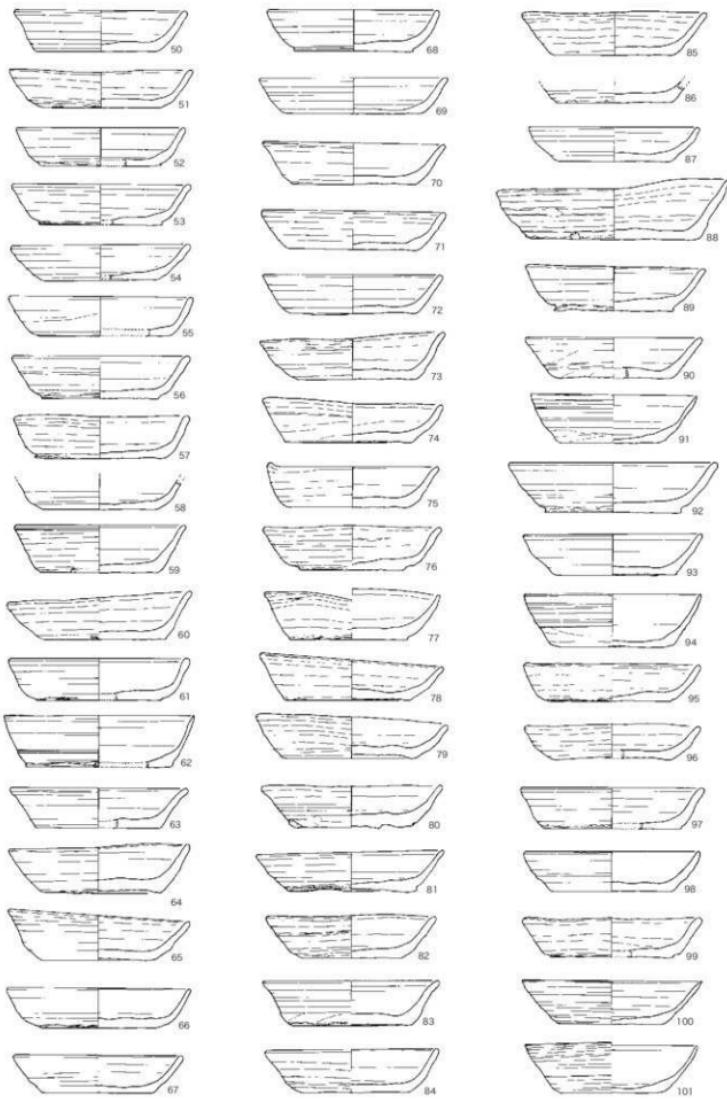


図9 SX001 第1面出土遺物(2)実測図 (S=1/3)

0 1 3 10 cm

第2面上層

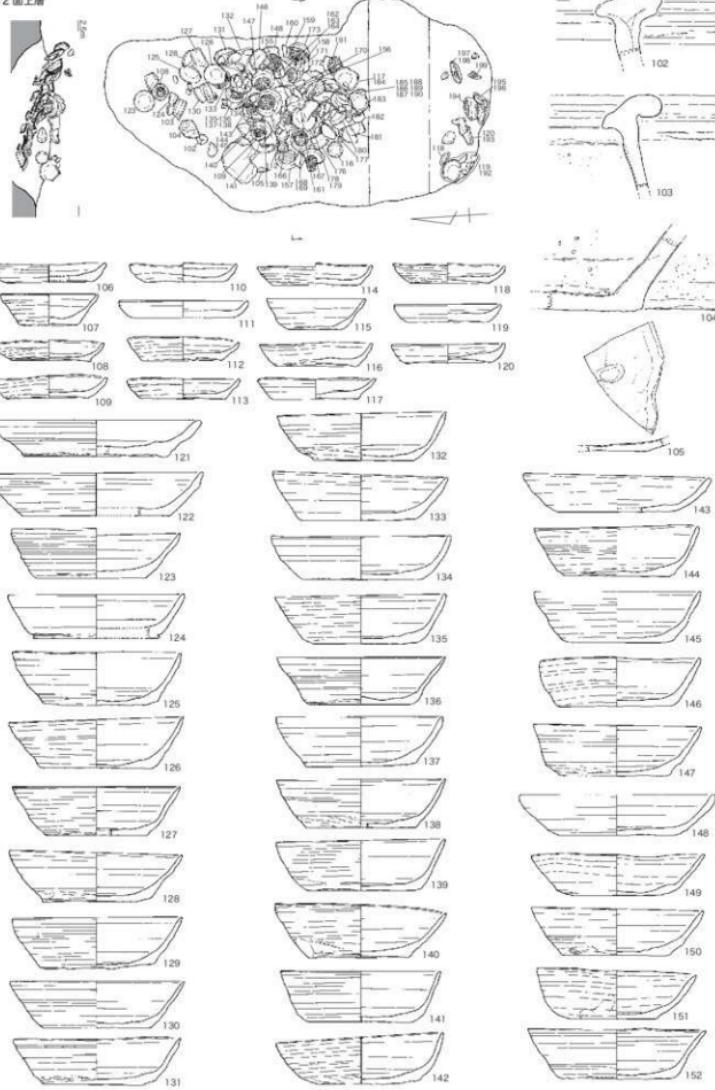


図10 SX001 第2面上層遺構実測図 (S=1/20)・出土遺物 (1) 実測図 (S=1/3)



図11 SX001 第2面出土遺物（2）実測図 (S=1/3)

第2面下層

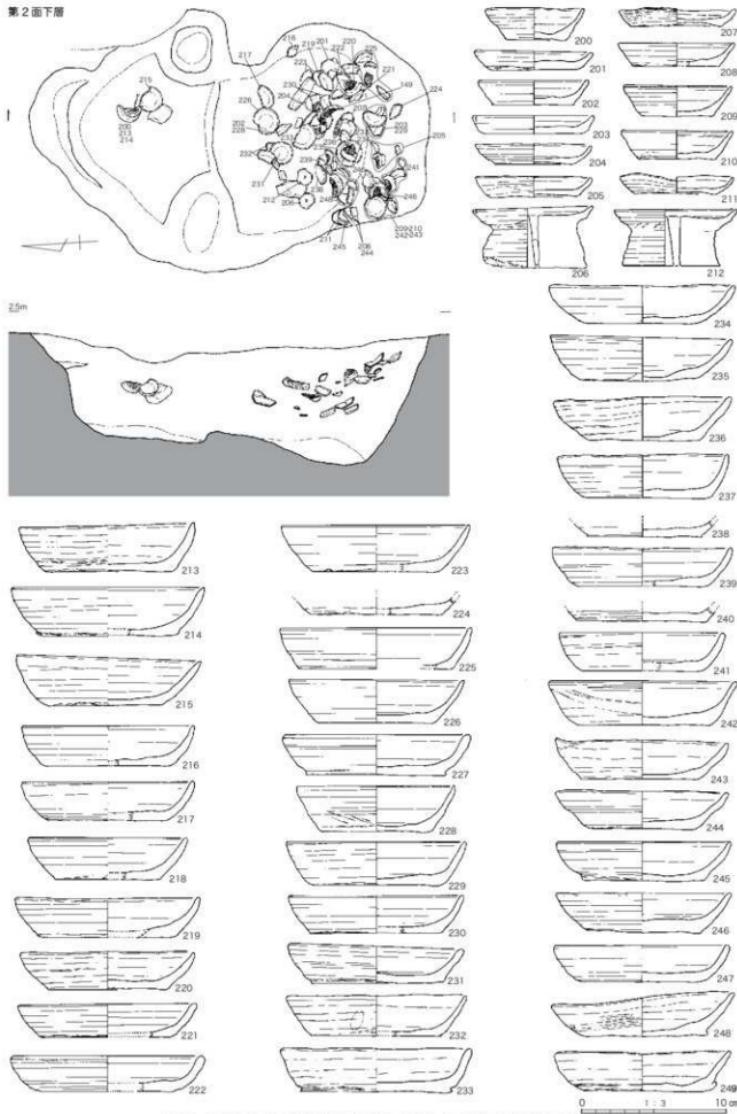


図12 SX001 第2面下層遺構実測図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)

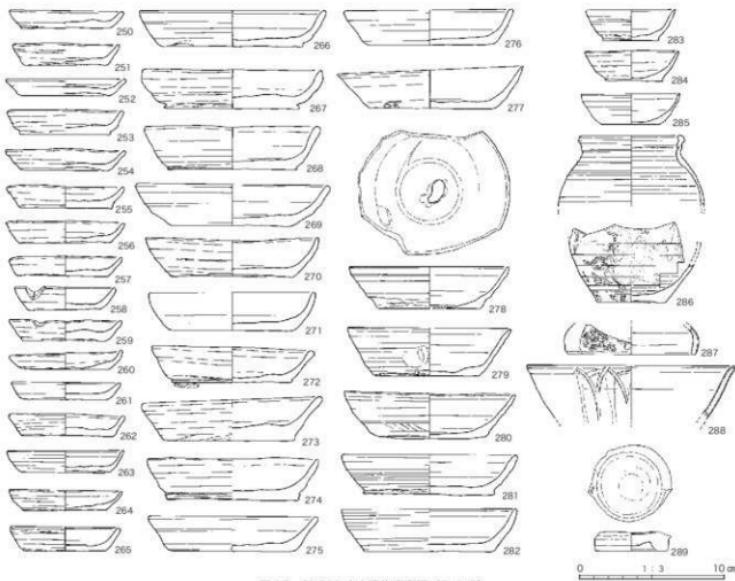


図 13 SX001 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.2 SX006 全景（西から）

口縁内外面にススが付着する。286は土師器小壺である。ほかの土師器類に比べて非常に薄手で稜線が鋭く、つくりが精緻な印象を受ける。淡クリーム色を呈し、胴部外面および底部に墨書きがある。287は青白磁合子蓋、288は龍泉窯系青磁碗、289は青磁碗の瓦玉である。以上から、時期は13世紀～14世紀と考える。

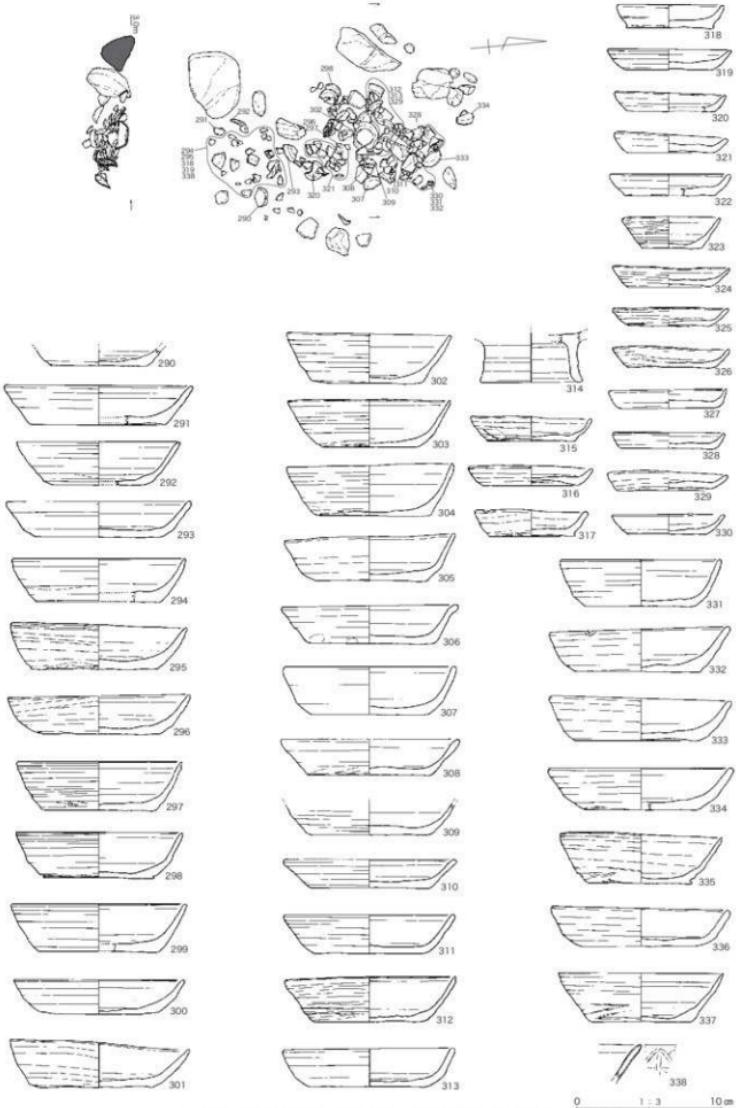


図 14 SX005 遺構実測図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)

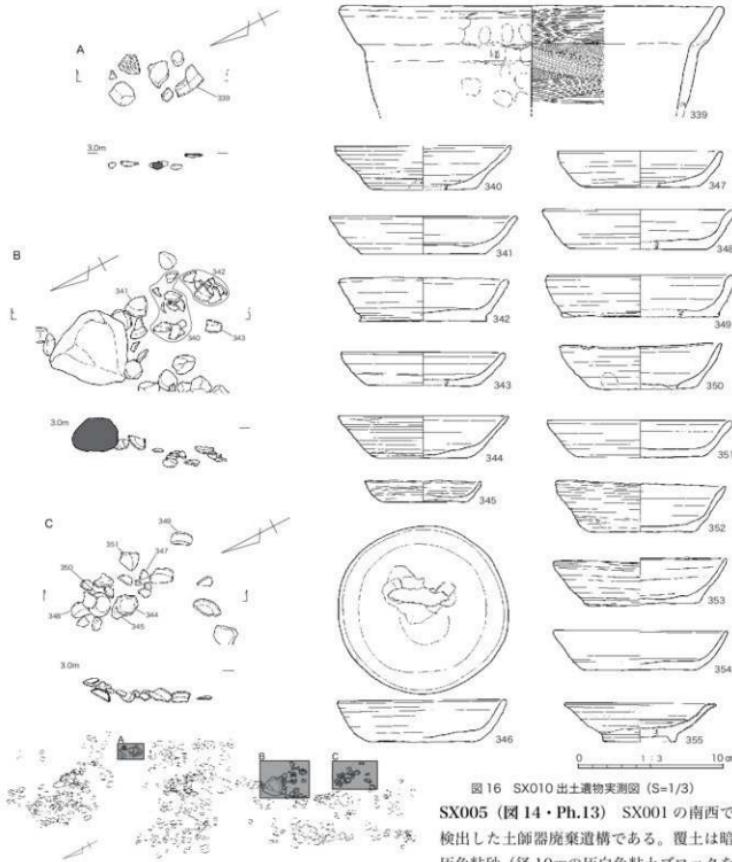


図 15 SX010 調査実測図 (S=1/20, 1/80)

たため、土師器の範囲を面的に掘り下げた。SX001に比べて完形品は少なく、小片が多い。土師器が東側の黒色砂まで続いて入っていたため、土師器の続く範囲を追いかけて掘削した。290～337は土師器で、いずれも底部糸切である。314は高台付皿、それ以外は壺・皿である。323は口縁部内外面、327・332は口縁部外面にススが付着する。とくに332は口縁部に3箇所焼成後の欠損箇所がある。灯台に置いた痕跡であろう。338は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。

SX010 (図 15・16) SX006 の最も南東側の土師器のまとまりを一括で SX010 とし、まとまりを A・B・C として遺物を個別に取り上げた。339は土師質土器鍋、340～354は土師器壺・皿でいずれも底部糸切である。346・350は灯明皿で、口縁部にススが付着する。346は見込み中央を焼成後穿孔し、軸孔とする。350は口縁端部の4箇所を欠く。灯台設置痕跡と思われる。355は白磁碗である。

図 16 SX010 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX005 (図 14・Ph.13) SX001 の南西で検出した土師器廃棄構造である。覆土は暗灰色粘土（径 10cm の灰白色粘土ブロックを多く含む）で、掘り込みは確認できなかつ



(3) 溝

SD009 (図 17・Ph.15) 第2面、調査区中央付近で検出した北東・南西方向にのびる溝である。埋土は暗灰褐色粘質砂で、南西側は拳大の礫を多く含み、北西端付近では瓦や陶磁器を多く含んでいた。北西側の瓦・陶磁器類は図化せず掘削してしまったが、南西側の礫は図化している。近世の石基礎であろう。356・358は染付碗、357は青磁碗である。361は滑石製石鍋で、外面にスヌが付着する。362は白磁碗、363は青磁碗転用瓦玉である。364は龍泉窯系青磁碗で、高台の一部は施釉前に欠損している。365は完形の土鍾である。366は蓮華文軒平瓦で、径1~2mmの白・黒色砂をやや多く含む。焼成は良好である。この他に近世陶磁器、龍泉窯系青磁碗、白磁碗、土師質土器鍋、土師器、瓦質土器、瓦が出土した。

SD2006 (図 18・19・Ph.14) 第2面、調査区中央やや南東側で検出した溝である。北東側はプランが不明瞭だったため、暗灰褐色砂の範囲を徐々に掘り下げた。標高2.8m付近でSD2006とSD2020の切り合いか確認できたため、以後遺物を分け掘削した。SD2006は第1面のSX001・005・006・010の下面にあたり、北東部分で検出した土師器のまとまりはSX001やSX005の続きと思われる。土師器は上層と下層で出土状況を作図し、個別に取り上げた(図18)。367~466は土師器壺・皿である。いずれも底部糸切で、つくりや大きさの特徴をみると、SX001で分類した①が主体である。403は口縁外面、465は胸部内外面にスヌが付着する。467は龍泉窯青磁碗で、碗1~3cm類である。

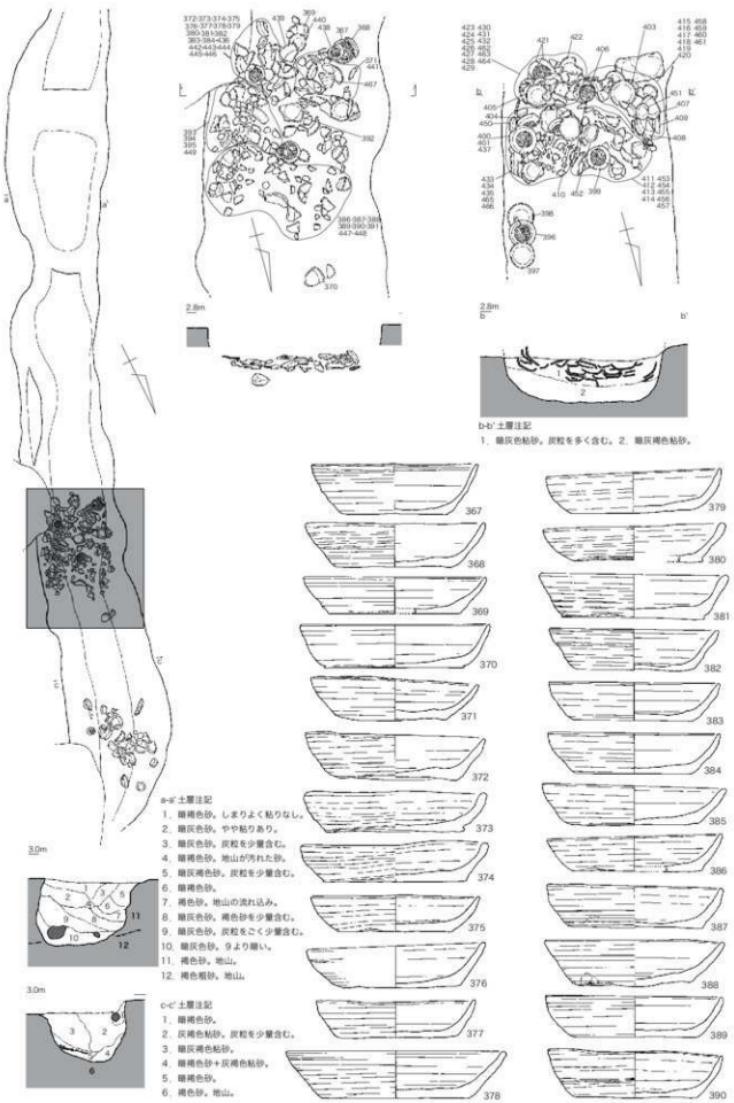


図18 SD2006 遺構実測図 (S=1/40・S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)

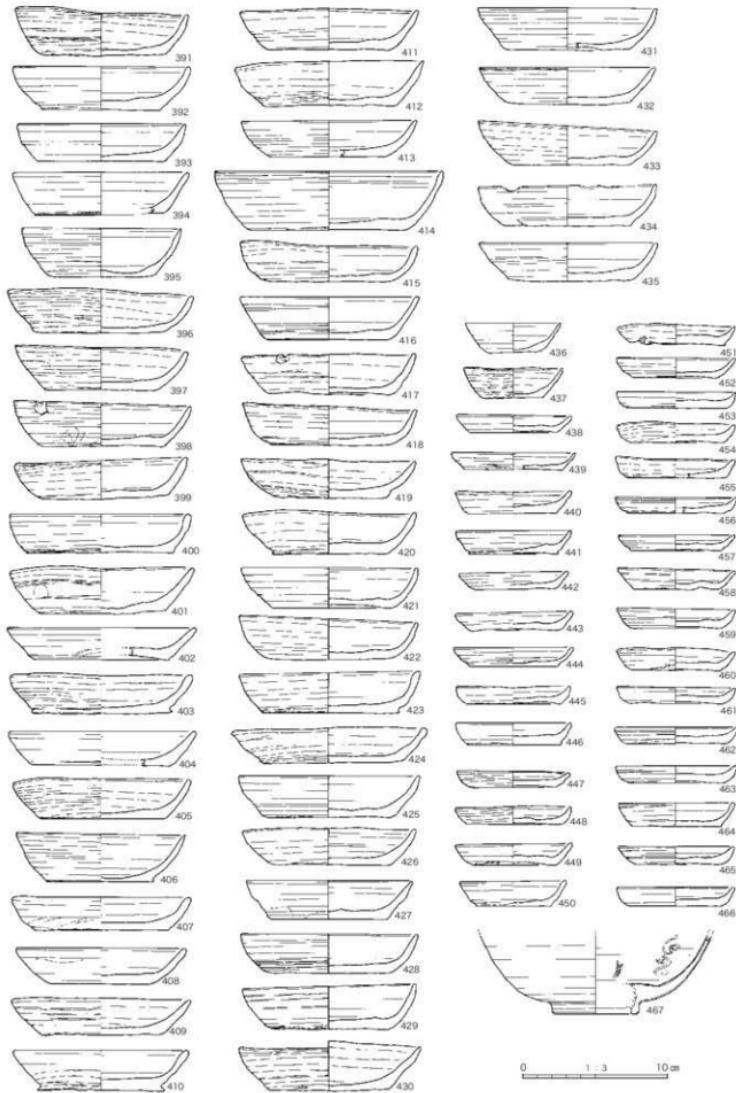


图 19 SD2006 出土遗物实测图 (S=1/3)

(4) 井戸

井戸は中世2基、近世以降4基の計6基を検出した。中世の井戸はSE2084・SE2087で、このうち井戸枠まで確認できたSE2087を取り上げる。近世以降の井戸のうち、SE028は瓦井戸であった。瓦の短側面に「江辻松永卯口製」の印がある。このほかは井戸枠が調査区外にあるもの(SE2004・SE2090)、壁面崩落の危険を考慮し未完掘のもの(SE022)で、様相が不明である。

SE2087(図20・Ph.18) 第2面、調査区北端で検出し、掘方最大幅3.9m、井戸枠径0.9~1mを測る。井戸枠材は桶だが、木材片がわずかに残るのみで遺存状態は良くない。第2面検出時点では、調査区北端付近全体が黒褐色砂で覆われていたため、井戸の切り合いだと想定した。段階的に掘り下げたところ、標高2.2m付近でSE2084の掘方プランとSE2087の井戸枠プランが見えた。以後、遺物を分けて別々に完掘した。

遺物は、井戸枠で国産無釉陶器、白磁碗、龍泉窯系青磁皿、土師器皿（底部系切）、土師質土器、平瓦、掘方で白磁壺、白磁碗、瓦器碗、須恵質土器が出ていたが、いずれも小片である。468は土師器皿で底部へラ切、469は土師器皿で底部系切である。

(5) 墓

ST2041(図21・Ph.17) 第2面、調査区東側で検出し、長軸長1.5m、短軸長1.2m、深さ0.9mを測る。遺構検出時、平面観察では捉えられなかった。周辺遺構の掘削で、重なった白磁碗が断面で確認できたため、再度精査し暗褐色砂でプランを捉えて掘り下げた。白磁皿1枚、白磁碗2枚を順

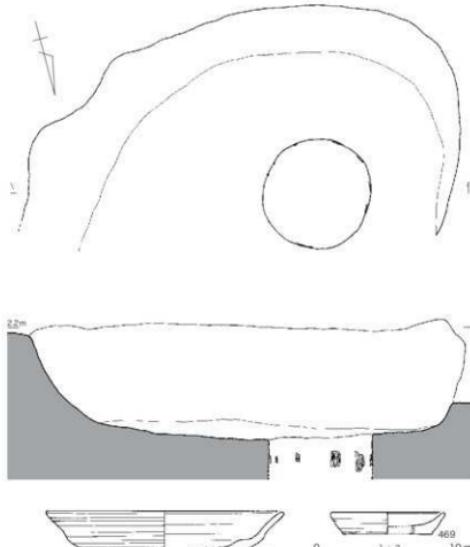


図20 SE2087 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

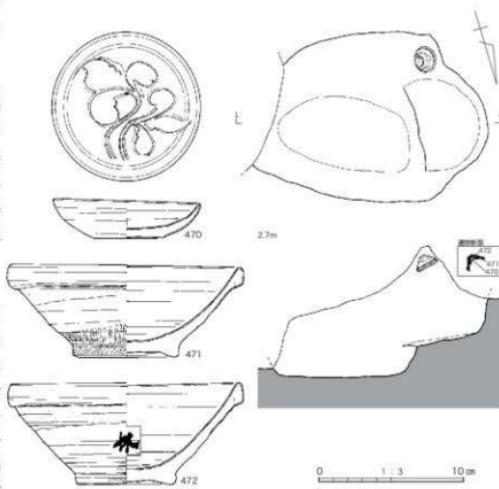


図21 ST2041 遺構実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

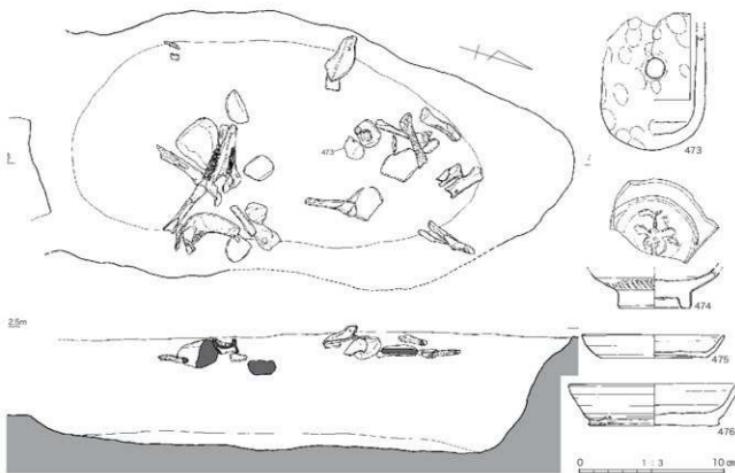


図22 SK2014 実測図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)

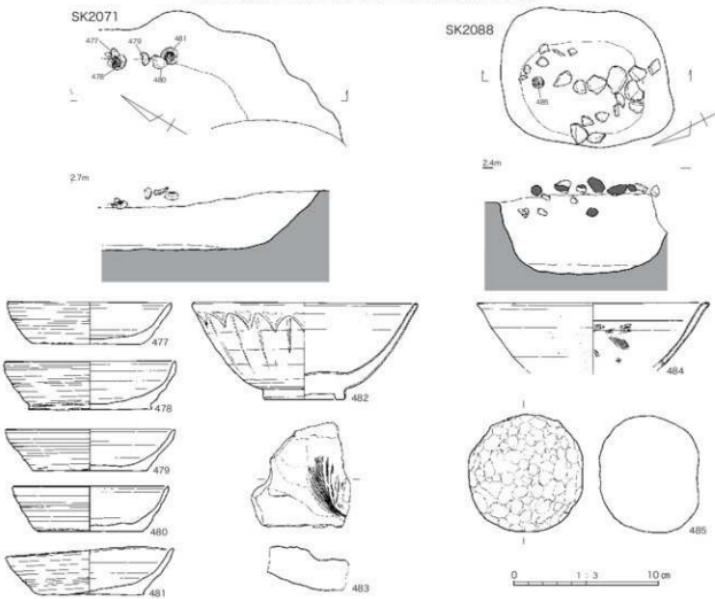


図23 SK2071・SK2088 実測図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)

に重ね、裏返して埋めている。いずれも完形品である。木材や鉄釘は出でないので土坑墓であろうか。人骨は出土していない。470は白磁皿で皿VII-1b類、471・472は白磁碗で椀IV-1a類である。472は胸部外面に「林」の墨書きがある。時期は12世紀中頃～12世紀後半と考える。

(6) 上坑

SK2014(図22-Ph.16) 第2面、調査区南端で検出し、長軸長2.5m、短軸長1.2m、深さ0.5mを測る。上下2層に分層でき、上層は人頭大の礫を多く含む灰色粘砂である。礫とともに馬骨(頭蓋骨・下顎骨ほか)が出土している。埋蔵文化財課・屋山洋氏の教示によれば複数個体あるという。下層は暗褐色粗砂である。

473は蛸壺である。胎土に径1～3mmの白色砂をやや多く含む。橙色を呈し焼成は良好である。474は龍泉窯系青磁碗で、見込みには施釉しない。475・476は土師器皿・壺で底部系切である。476は回転ナデ後見込みに静止ナデを施す。このほかに平・丸瓦、瓦質土器火鉢、土師質土器、須恵質土器などが出ている。

SK2071(図23) 第2面、調査区西端で検出した。埋土は暗茶褐色砂で黄灰色粘土粒を少量含む。下層は暗灰色粘質砂である。上層で土師器壺・皿が少量まとめて出土した。477～481は土師器壺でいずれも底部系切である。478は回転ナデ後に見込みに静止ナデを施す。482は龍泉窯系青磁碗で椀II-b類である。483は線刻のある石材で、石造物の部材片であろうか。時期は13世紀前半を想定する。

SK2088(図23) 調査区中央付近、第2面で検出し、長軸1.2m、短軸0.95m、深さ0.5mを測る。埋土は、上層は暗茶褐色粘質砂で炭粒を少量含む。下層(底面から厚さ10cm程)は地山の褐色砂に上層の砂を含む。上面に拳大の石が疊らに集積する。484は白磁碗である。485は石弾で、径7.9～8.1cm、高さ6.8cmを測る。岩質は凝灰質砂岩と思われ、成形は叩打による。底部に平坦面をつくる。

(7) その他の出土遺物(図24)

486は土師器高台付皿で、口縁内面にススが付着する。487～489は龍泉窯系青磁碗である。489は底部に墨書きがある。490は白磁碗、491は白磁壺である。492は滑石製石鍋を転用した石錘である。鉗下部に穿孔を施す。493は滑石製石鍋で、外面にススが付着する。494は唐草文軒平瓦である。胎土に径1～3mmの白色砂を少量含む。灰黄色を呈し焼成は良好である。

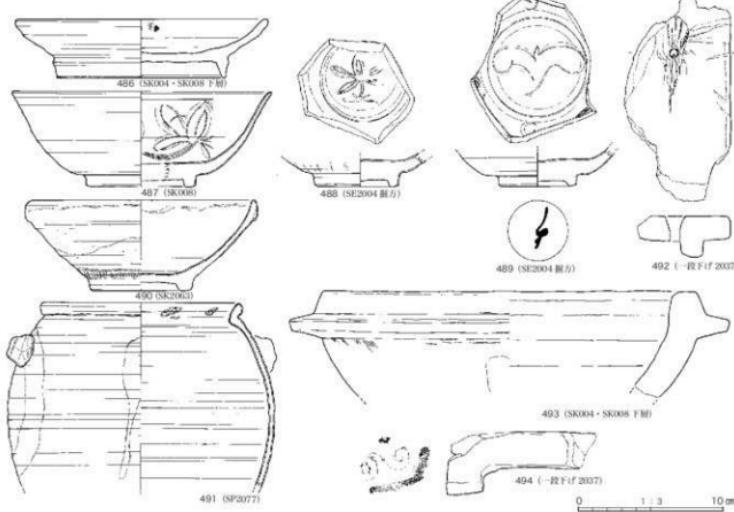


図24 その他の出土遺物実測図 (S=1/3)

第IV章 総括

1. 本調査地点の成果

- ①箱崎遺跡第101次調査地点で検出した遺構の初現は、12世紀中頃～後半の墓(ST2041)である。この墓は21次調査地点の墓域の広がりを示すと考える。その後13世紀以降に建物や区画溝、井戸が形成される。当該期は箱崎遺跡全域で遺構が認められるが、とくに「遺跡西側の緩斜面を積極的に利用している」とする指摘に合う(中尾2018)。
- ②検出した土師器廃棄遺構SX001・005・010と溝SD2006は、掘削・記録の都合上分けて報告したが、同一の土師器廃棄場を示すものである。時期は13世紀～14世紀を想定する。当初は溝・土坑に廃棄し、それらが埋まつた後も地表面に廃棄が続いた。
- ③SK2088出土石弾は長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土例に近似し、元寇に関わる遺物の可能性がある。

2. 土師器廃棄について

本地点で検出したSX001・005・010、SD2006のような地表面や区画溝への土師器廃棄は、1次SD13・54次SX392・70次SX04などで検出している。また、51次SX2274では建物下面で出たことから報告では祭祀を想定する。このうち1次SD13は、「西側には石垣状の石積みがあり、浅いテラス状の段の東側に深い溝状の落ち込みがあり、多量の遺物が廃棄されて」いたとあり、今回の状況に似ている(池崎編1988:p.221)。溝理没後も同じ場所に棄てており、廃棄場の意識が続いたことがわかる。

3. SK2088出土の石弾

SK2088出土石弾は、他の石とともに二次的に土坑に集められたものである点は留意すべきだが、長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土石弾(古澤2018)に形態や法量が近似し、元寇に関わる遺物の可能性がある。

箱崎における元寇の戦いを考古学成果からみると、元寇防壁や焼土層などの遺構はこれまで注目を集めてきた。一方で武器・武具など直接的に戦いを示す遺物が出た明確な事例はない。これらは戦場からもち出されて(千田2000:p.247)、再利用されたのだろう。「昭和八年五月十一日」に「九州帝國大學醫學部構内」で「てつはう」が出土したとあるが(筑紫史談会1933a)、不詳である。また、佐藤一郎は直径2cm前後の石製球(槌杖玉)を石合戦で用いた飛鏢の可能性があると指摘した(佐藤2013)。その用途を判断するのは難しいが、今回出た石弾はこれまで出た石製球よりも大きく、類例もふまえれば、飛鏢とみてよいと考える。

参考・引用文献

- 池崎謙二編 1988『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 博多』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 193集)
- 市原季彦・下山正一 2019「I, HZK1802 地点におけるジオスライサー調査の成果」三坂一徳・谷直子編『箱崎遺跡-HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点-付 HZK1802・1803 地点概要報告』(九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集) pp.118-130
- 久住猛雄編 2019『箱崎 58』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1373集)
- 佐藤一郎 2013『第6章箱崎遺跡-古代末から中世にかけて』福岡市史編纂委員会編『新修福岡市史-特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』 pp.242-247
- 重松敏彦 2018『古代の箱崎と大宰府』九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.24-35
- 下山正一 1998『福岡平野の繩文海進と第四紀層』小林茂ほか編『福岡平野の古環境と遺跡立地-環境としての遺跡との共存のために-』九州大学出版会 pp.11-44
- 千田嘉博 2000『W 城郭と戦い』『鐵農系城郭の形成』東京大学出版会 pp.242-272
- 筑紫史談会 1933a『筑紫史談』59
- 筑紫史談会 1933b『筑紫史談』60
- 中尾祐太 2018a『考古学からみた箱崎と博多湾』『九州史学』180 pp.3-32
- 中尾祐太 2018b『考古学からみた箱崎』九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.10-23
- 古澤義久 2018『(3) 石弾について』片多雅樹編『鹿島海底遺跡【平成25年度から平成29年度までの調査成果】』pp.42-48
- 山本信夫 1990『統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-』『九州上代文化論集』 pp.349-386



Ph.3 ST2041 出土遺物

写真図版



Ph.4 I-kanzaki 2nd area 全景 (西から)



Ph.5	
Ph.6	Ph.8
Ph.7	

Ph.5 I区第2面全景（南西から）
Ph.6 II区第1面全景（南西から）
Ph.7 II区第2面全景（南西から）
Ph.8 I区第1面全景（南西から）



Ph.9 SX001 第1面上層出土状況（東から）



Ph.10 SX001 第2面上層出土状況（西から）



Ph.11 SX001 第2面上層出土状況（南から）



Ph.12 SX001 第2面下層出土状況（西から）



Ph.13 SX005 出土状況（南東から）



Ph.14	Ph.15
Ph.16	Ph.17
Ph.18	

Ph.14 SD2006 (南西から)
Ph.15 SD009 (北東から)
Ph.16 SK2014 (南から)
Ph.17 ST2041 (北東から)
Ph.18 SE2087 (北から)



Ph.19 33 (SX001)



Ph.20 47 (SX001)



Ph.21 101 (SX001)



Ph.22 126 (SX001)



Ph.23 346 (SX010)



Ph.24 403 (SD2006)



Ph.25 22 (SX001)



Ph.26 206 (SX001)



Ph.27 212 (SX001)



Ph.28 286 (SX001)



Ph.29 483 (SK2071)



Ph.30 485 (SK2088)



Ph.31 470 (ST2041)



Ph.32 471 (ST2041)



Ph.33 472 (ST2041)

報告書抄録

ふりがな	はこざき 63							
書名	箱崎 63							
著書名	箱崎遺跡第101次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1428集							
編著者名	神 啓崇							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2021(令和3)年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はこざき-63 箱崎遺跡	福岡市東区箱崎 3丁目 2395-5他3筆	4013I	2639	33°37'9"	130°25'27"	2020(令和元) 年9月3日 — 2020(令和元) 年11月8日	175	共同住宅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
箱崎遺跡	集落跡	中世	土師器廐窯遺構／調 ／井戸／土坑／柱穴		土師器／瓦器／陶磁器／金 属製品／石製品			
要約	箱崎遺跡は博多湾岸の砂丘上に立地し、中世を中心とする遺跡である。本調査地点は遺跡の北東に位置し、中世の町家跡を確認した。井戸や隣の町家との境界を示す溝、土師器壊・皿の廐窯遺構、馬骨出土土坑、土坑墓を検出した。中世箱崎の人びとの生活を考えるうえで重要な成果を得た。							

箱崎 63

—箱崎遺跡第101次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1428集

2021年3月25日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印 刷 有限会社 タスク
福岡市中央区赤坂2丁目2-5

